

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名	ヨ イエン YU Yiyen		授与番号 甲 第1367号
学位の種類	博士(文学)	授与年月日	2019年9月25日
学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項該当者(学位規則第4条第1項)		
博士論文の題名	竹内好の向きあった中国と文学 —戦中戦後の日記から読む—		
審査委員	(主査) 上野 隆三 (立命館大学文学部教授)	北村 稔 (元立命館大学文学部教授)	
	内藤 由直 (立命館大学文学部准教授)		
論文内容の要旨	<p>【論文の構成】</p> <p>本論文は、序章と第一章から第四章と終章で構成される。序章終章以外のタイトルは第一章:竹内好の文学観の形成—北京留学を契機として—、第二章:竹内好による「文学者」魯迅像の生成—小田嶽夫の「愛国者」魯迅像への懐疑—、第三章:日本の戦争システム下の文学者の交流—竹内好の魯迅像と武田泰淳の司馬遷像を例として—、第四章:竹内好の浦和時代における日本文学の再発見、である。</p> <p>【論文内容の要旨】</p> <p>本論文は竹内好の文学観や思考の動きと中国体験や作家との交流などとの関係性について、日記等の資料を中心に検討することから明らかにしようと試みたものである。</p> <p>まず、第一章では、竹内好の北京留学時期の体験や考えを「北京日記」などの資料から検討し、一時文学に絶望してそれを放棄しようとした竹内好が再び文学に回帰するという過程を経た背景を探る。その間の竹内好は私小説を重視する姿勢や、エリート意識による自分の優越感を捨て、恋愛体験を経て、北京の社会において辛酸をなめる一般の民衆の生活を発見し、それを愛した。そうした苦悩を経た竹内好は成長し、文学と社会における民衆の生活との結合を重視するようになったのだ、と結論づける。</p> <p>竹内好一人の体験と文学観の形成を研究した第一章と異なり、続く第二章、第三章及び第四章では、竹内好と彼の知人たちとの関連性を研究した。</p> <p>第二章では、竹内好の『魯迅』における文学者魯迅像と小田嶽夫の『魯迅伝』における愛国者魯迅像の相違を比較した。第一に、小田は魯迅の一部の作品を真実であるとして論考を進めたが、竹内好はその姿勢を批判したという魯迅のテキストに対する解読方法の違いを指摘した。第二に、文学観、文学における「愛」、魯迅は「改革者」かどうかといった側面から二人の描いた魯迅像の差異を分析した。第三に、小田と竹内好の魯迅像の差異の背景に両者の日本批判の差異やそれぞれの人格の相違と関わっていることを明らかにした。小田の魯迅像は</p>		

中国の社会改革の象徴であり、魯迅の文学は社会改良の重要な手段であると考えたため、そこに社会改革を指導する功利的な小田の立場が見られる。一方、竹内の魯迅像は、深い自己認識を基礎として自己確立を試みるものであり、そこから文学を手段として見なさない非功利的な竹内の立場が見られる、とする。また、弱者魯迅を描く竹内の『魯迅』は英雄魯迅を描く小田の『魯迅伝』と比べて、弱い立場の民衆に近いと結論付けるとともに、竹内好の『魯迅』の形成過程において、小田の『魯迅伝』は重要であったとする。

第三章では、1930年代に武田泰淳と竹内好が共有した中国体験に由来する心情と1940年代における武田と竹内の関係の内実を詳細に考察した。竹内と武田は同じ時期に『魯迅』と『司馬遷』を書いたが、両作品は文学者あるいは記録者が強圧的な為政者によって不遇になるという点で共通する。混乱状態に陥る状況の下で、文学者魯迅と記録者司馬遷は自分の絶望と社会の停滞、混乱、落後を描いた。一方戦時中、武田と竹内は当時対中戦争において優勢であった日本人がどうあるべきかを考えていたので、戦争動員の国家の支配者の側、あるいは中国人を害する日本軍側の絶対的な強者の立場には立っていないと主張する。これら二作品の共通点は、2人の交流と議論によって生じたと筆者は推察する。

第四章では、竹内好の浦和時代における日本の文学に対する思考の流れを考察し、竹内の日本文学の再発見について研究した。竹内が戦時中に思考した日本国民文学は天皇制との関係における国民の文学であったが、そうした思考は敗戦によって崩れた。復員後に浦和で生活する中で、竹内は孤独の中で苦悶し、次第に政府と人民について考えるようになり、後に日本のプロレタリア文学における進歩的な「勤労階級」の概念の下で人民を理解するようになった。しかし、中野重治の文学作品を中心に多くの著作に接するうちに、竹内は進歩的な「勤労階級」とは異なる、素朴な人間像、及び反権威の意識を発見した。このように竹内の国民文学に対する思考の過程において、中野重治が重要な位置を占めているとした。

さらに終章では、先行研究をもとに『山びこ学校』への竹内の傾倒などが後の国民文学論争への原点である可能性を示しつつ、今後の研究の方向性を示している。

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">論文審査の結果の要旨</p>	<p>【論文の特徴】</p> <p>本論文では、竹内好の国民文学論争に到るまでの、文学観や著作に結実する思考の動きを丹念に追ったこと、そしてそれを日記資料を中心とした日常生活から再検討を試みたこと、竹内と他の作家たちとの関係性を考察したことである。特に、日記資料をこうした研究の主たる材料とすることは近年必ずしも主流とはいえないが、新しい発見もあり、論考としては成功をしていると言える。</p> <p>【論文の評価】</p> <p>本論文で高く評価すべきは、これまであまり検討されてこなかった日記資料を軸に、日本と中国を行き来した竹内の移動にあわせて、その思考の動きを極めて丁寧に追ったことである。それにより第一章では竹内の文学観の生成の背景、第二章と第三章では『魯迅』執筆の思考の背景、第四章では国民文学論争の前段階での思考の動きについて、結論を示すことができた。また第四章で示された竹内が中野重治から受けた影響については、先行研究でもほとんど言及が無く、新しい視点を提示できたことも評価できる。課題としては、筆者自身も書いているように、竹内好が自分の行動や感情を全て正確に日記に書いているわけではないため、日記の内容を竹内の思考の動きの理由とすることには不安が残るといことがある。この点に関して筆者は十分に理解したうえで、新たな可能性を示すことを意図したことが、公開審査で確認できた。また、多数の先行研究を丹念に読み込んだことは極めて高く評価するものの、それら先行研究を批判的に扱うことが少ないことはやや残念であった。表現面では、筆者が丁寧に説明しようとしすぎて語彙が過多となり逆に分かりにくくなっている点、説明不足な部分がある点、自分の考えに都合の良い部分をやや短絡的に使用した部分がある点など、主として日本語能力に由来する問題点もあるが、これらの指摘に対しては筆者自身も課題と認めつつ、今後の改善に向けての意欲を示した。逆に言えば留学生でありながら自ら研究会等に参加するなど、困難を打破しようとした積極的な姿勢は評価できる。また、これらの問題点は、本論文全体の価値を損なうほどのものではない。</p> <p>以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">試験または学力確認の結果の要旨</p>	<p>本論文の公開審査は2019年6月29日(土)午後1時から午後3時30分まで、末川記念会館第2会議室で行われた。</p> <p>審査委員会は、公開審査において本論文の執筆の意図や各章の内容について問う中で、本論文の論考には欠かせない中国現代文学や日本近代文学、中国と日本の近代史についての申請者の知識、その分野の文学史的意義について試問し、それぞれについて十分な回答を得ることができた。また、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在籍期間中における学会や研究会への参加や発表などの様々な研究活動の学問的意義、および本論文執筆との関わりについても質疑応答を実施した。それらを通じて申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。</p> <p>したがって、本学学位規程第18条第1項に基づいて、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することが適当であると判断する。</p>